

# 共著者の貢献と責任：問題点と解決策

佐竹健治<sup>1)</sup>

## 1. はじめに

論文や報告書を執筆・出版するとき、共著者をどうするか、というのはいつも悩むことである。これは、研究分野や国、さらに時代を越えて共通する問題のようだ。米国科学アカデミー(1996)にも、共著者や著者の順序についての慣習は分野によって異なること、研究者のキャリアの段階(大学院生や若手と指導者やリーダー)を考慮する重要性、名誉著者(実質的な貢献はないのに名前だけ連ねている著者)の問題、共著者全員が論文の内容全てに責任を持つこと、などが述べられている。

共著者をめぐるトラブルとして、(1) 貢献をしたのに共著者として名前が入っていない、(2) 内容に同意していないのに(あるいは論文を読んでいないのに)勝手に著者に入れられてしまった、の二通りがある。(1)は著者としての権利に基づくもので、(2)は著者としての責任に関するものだ。日本では(1)をよく見聞きするが、外国では(2)が問題になることが多い。(2)については、学会の編集委員会などに持ち込まれ、訂正・お詫びなどの形で公表されることもあったが、最近では投稿時に著者全員が同意していることの確認をとるのが一般的だ。(1)についてのトラブルは、公の場に持ち込まれずに内在化し、人間関係のトラブルに発展することもある。

本稿では、主に私自身の経験に基づいて共著者のあり方を考えてみたい。従って、対象は地球科学の国際誌や産総研の出版物(『活断層・古地震研究報告』など)に掲載される論文・報告に限られる。以下、2で共著者の役割について再検討し、3で共著者となるのが影響してくる研究者の評価について考える。4で、共著者の役割を明確にするための幾つかの試みを紹介しよう。

## 2. 共著者の役割

論文の共著者には、その貢献度に応じた権利がある一方、内容についての責任も生じる。

貢献の例としては、アイデアを出してプロポーザルを書きプロジェクトを総括した、野外調査や調査航海に参加してデータ取得に貢献した(時間と労力を提供した)、試料の分析・データ解析・モデル計算を行なった、などがある。長期にわたるプロジェクトのまとめの論文を書く際には、最終段階での貢献だけが記憶に残り、プロジェクト初期の貢献が忘れがちになることもある。貢献に際して問題になるのは、役務やアルバイトとして(つまり金銭を受け取って)仕事をした場合の取り扱いである。貢献に対する対価は金銭として支払われているので共著者にする必要はないという考え方もあるが、発注者だけが著者となって実際に仕事をしたのが誰だかわからないのも困る。活断層研究センターでも、多くの仕事を外注してきている。地質調査所の頃は、報告書の著者は発注者だけとして、学会発表(口頭・誌上とも)の共著者をどうするかは責任者に任せられていた。現在、『活断層・古地震研究報告』では、受注側の責任者・担当者にも共著者に入って頂いている。

共著者は一方で、論文の内容についての共同責任を負う。実験結果の捏造などの不正行為はともかく、筆頭著者のミスや未熟による誤りに、共著者がどこまで責任を負うのか、というのは難しい問題である。特に明記されてない限り、共著者全員が論文の内容全て(不正やミスも含めて)に責任を負うというのが国際的なルールだ。私の知りあいの外国人は、日本語が読めず内容に責任を負えないからという理由で論文の共著者になることを拒絶

1) 産総研 活断層研究センター

キーワード: 共著者, 貢献, 責任, 評価, 謝辞

した。論文ではないが、科学研究費では、経理上の不正行為があった場合には共同研究者も一定期間応募資格が剥奪されるなど、共同研究者の責任が問われるようになり、従来のように気軽に「名前を貸す」ことを戒めている。

研究者としてもっと本質的な問題は、論文の結論、すなわち分析結果や解釈についての責任であろう。例えば、データの取得に貢献のあった共著者全員が、得られたデータの分析結果やモデル・解釈に同意し、責任を持つとは限らない。むしろ、同じデータから異なる(極端な場合は正反対の)モデルや解釈が生じる場合もある。ところが、データの取得に貢献したという理由で、同じ著者が、全く別のモデルや解釈を論じた複数の論文に著者として名を連ねている場合もある。

### 3. 研究者の評価と共著者問題

共著者が問題になるのは、論文が研究成果の公表の唯一の手段であり、研究者は論文によって評価されるからだ。

研究者の評価は、分野や研究者のキャリアの段階(大学院生・ポスドク・中堅・リーダー)によって異なる。たとえば、共著の論文は多いが筆頭の論文が少ない研究者がいたとしよう。若手の研究者の場合は、自主性がないと低く評価されることもあるが、大学院生の指導教官やリーダーの場合はむしろ逆に指導力があると高く評価されることもある。

また、評価される研究者個人の思想によっても異なるだろう。データの取得(しばしば多額の予算を伴う)に重きを置いている研究者は、結果がどうであれ数多くの論文の共著者になっていることが重要と考えるだろうし、解釈やモデルを重視する研究者は、結論の異なる複数の論文の著者に名を連ねることを嫌うだろう。

研究者は、論文の数でなく質で評価されるべきであるが、現実には、論文の数が多い方が高く評価されがちである。従って、ポスドクや任期付きの研究者などが、内容に責任を持ってないからといって共著者になるのを辞退するよりは、実績を増やすために名を連ねることを選ぶことを非難するのは難しい。

最近では、世間一般でも産総研でも、アウトプットよりもアウトカムが重要視されるようになってきた。研究論文の場合、筆頭著者や共著者として発表した論文の数よりは、これらの論文が他の論文に何回引用されたか(被引用数)が重視されるのだ。論文の発表数よりも被引用数が重視されるようになれば、研究結果を小分けにして論文の数を増やしたり、あちこちの論文に共著者として名前を連ねるたりするよりも、少数であれ質の高い(他人に読まれ引用される)論文を書くことが重視されるようになってくる。国際誌に発表された論文毎の被引用数は、Web of Scienceなどで容易に調べることができる。自分が発表した論文がどのような論文で引用されているかを見るのは、研究の発展にとって有益であり、また楽しみでもある。よく、雑誌のインパクトファクター(その雑誌に掲載された論文がその後の2年間に他の論文で引用された数の平均値)が話題に上るが、重要なのは掲載された雑誌のインパクトファクターでなく、個々の論文の被引用数なのであり、これがもっと評価されるべきだ。インパクトファクターの高い雑誌に投稿して受理されても、その論文が引用されなければ何の意味もない。

### 4. 共著者の役割を明らかにするための試み

以上、共著者をめぐる問題点などを述べてきたが、最後に、共著者の役割を明確にするために実際に行なわれている幾つかの試みを紹介しよう。

#### (1) 調査の参加者全員で速報を発表する

私が参加してきた国際的な野外調査や調査航海では、参加者全員を共著者としてpreliminary reportを発表(例えばAmerican Geophysical Unionの週刊情報誌であるEosなど)し、以降の論文は、上記を必ず引用するという方法がとられたことが何回かある。これによって、調査や航海に参加したメンバーの貢献が明らかになる一方、それ以降の論文で発表されるデータの分析結果や解釈については、関係する研究者だけが責任を持てばよいことになる。実際、ある航海では、得られたデータの解釈について、参加者の意見が完全に二つに分かれたことがあった。

## (2) 共著者の順序は機械的なものとする

共著者として誰を入れるかが決まっても、次に順序の問題がある。貢献順というのが一般的だが、調査に参加した日数などの客観的な数字で表せない場合には、主観が入ってしまうことが多い。これを避けるために、共著者の順序をアルファベット順（筆頭著者を含める場合とそうでない場合がある）や所属の順など、機械的なものとして、その旨を謝辞に明記しておくことがある。共著者が納得し、トラブルを避けるのには役立つが、それぞれの共著者の役割は明白ではない。

## (3) 謝辞などで共著者全員の役割を明記する

地質図幅の説明書では、「まえがき」や「あとがき」で調査分担者や執筆分担者を明記している。また、論文の「手法」で、調査や分析の責任者を明記することもある。

共著者全員の貢献と責任を明らかにするには、謝辞で全員の役割を列記する（たとえば、Aは野外調査に参加した、Bは分析や計算を行なった、Cは論文の執筆に関わった）という方法がある。医学系など幾つかの研究分野ではすでに確立されているらしいが、他の分野にも徐々に広まりつつあり、Natureなどはこれを推奨している。我々もこの方法を採用したことがあるが、共著者になるべき人を客観的に判断するのも役立つ。ただし、論文

そのものを見ないと、引用文献欄や履歴書などの業績リストを見ただけではわからない、という欠点はある。

## 5. まとめ

論文の共著者には貢献と責任という二つの側面がある。共著者になるということは、研究者の評価とも関係し、これは研究者のキャリアやポストの安定性にも依存する。共著者の貢献と責任を明確にするためには、論文の謝辞で共著者全員の役割を列記するのが最良の方法だろう。

**謝辞：**活断層研究センターの粟田泰夫・岡村行信・澤井祐紀・遠田晋次・堀川晴央・吉岡敏和の各氏（五十音順）からは、原稿について有益なコメントを頂いた。

### 文 献

- 米国科学アカデミー編(1996)：科学者をめざす君たちへ—科学者の責任ある行動とは(池内 了訳)．化学同人，90p.(原文は<http://www.nap.edu/readingroom/books/obas/>で読むことができる)．  
Nature (1999)：Policy on paper's contributors, Nature, 399, 393, doi: 10, 1039/20743.

SATAKE Kenji (2005)：Contributions and responsibilities of coauthors: problems and solutions.

<受付：2005年1月25日>